



： 卷 頭 言 ：

「宮沢賢治と農業」

(財)日本植物調節剤研究協会 東北支部長 荻原武雄

先日、農業生産者と消費者が宮沢賢治生誕の花巻市で、食の安全・安心と地域農業をどのように守るかをテーマに、農産物の直売や手打ちそばの講習、手作りバター作りなどをしながら「食と農の祭り」を開催した。

ことに米価の低迷が米農家には深刻な問題になっている時期でもあり、このことを消費者に実感してもらおうと自販機で売っている140円の清涼飲料水と並べ、500mlのペットボトルに新米の“ひとめぼれ”を詰め、現状の米価の120円で販売した。購入した消費者は、家族一日分の米代金が120円にしかないことに気づかれたようだ。

午後には、宮沢賢治研究者の三上満氏から「農と宮沢賢治」のテーマで講演をいただいた。私には初めての内容も多く未消化であるが、賢治の農村での実践や稲作指導、花巻農学校での様子、土壌改良のための石灰肥料の販売など農業指導者の様子のほか、「農民芸術概論綱要」で「近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致において論じたいと」技術と宗教と農業実践を一体的に見ていることを知ることができた。

賢治(1896-1933)のこの時期、岩手には詩人石川啄木(1886-1912)も生まれている。

二人が童話を書き詩を読んだ明治末期の岩手は、専業農家率68%、小作農家率28%で、その後の大正にかけて農家戸数は漸減し、小作地率は高まり32%程度に上昇している。日清・日露戦後の不況と明治35年、38年と続いた凶作によって相対的に農業の地位が低下した時期である。

当時の大地主の全ては、金融業者すなわち担保流地の集積地主で開墾・開拓によるものではないとされている。

裕福な家に生まれ、岩手を生活の場とし身近

に農村を見ていた賢治に対し、啄木は生活苦に追われ遠くから故郷岩手を見ていた二人は対照的であるが、当時の農村の貧しさを賢治は忸怩たる思いで見えていたのであろう。

自分にできるものは何か、自ら農民となり実践を通して生産者と同じ目線で幸せを求め、宗教的な次元まで追い求めたのかもしれないが、資本主義経済の勃興、海外貿易の増加、農村の封建制と地主制度等の大きな力と壁に挫折感も感じ、「雨ニモマケズ」を書き残したのではと私なりの勝手な解釈をしている。

三上満氏は、賢治が求めたのは「自ら作ってこそ農民」であり「農の心」は平和の心であると説かれた。

先の農地法の改正によって、耕作者主義の農地所有制度から利用者主義に変えられた。新政権はMA米70万トンの輸入は続けると約束している。戸別所得保障に期待をしたいが中身が分からない。今も、米作農家は米を作っても生活が成り立たず耕作放棄地が増加し、若者は都市に出て派遣切りで路頭に放り出される実情は、賢治のこの時代に秋田県大館市生まれのプロレタリア作家小林多喜二(1903-1933)が「不在地主」や「蟹工船」を書いており、当時の社会情勢や農村の状況が彼らを育て書かせたのであろうが、「蟹工船」が50万部以上のベストセラーになっているのは、同じ歴史を繰り返しているからであろうか。

賢治が求めた理想社会イーハトーブとは、農地が当たり前前に農作物が作付け管理され、米作の農作業労賃が最低賃金を上回る米価格で売れ、若者が農業に就いても生活が可能で、主要な農産物は自給可能な条件が整えられる農村ではなかったのか。